

## 世界的企業とガン闘病の最前線で学んだこと

## 『いのちのスタートライン』

大久保淳一著 講談社 1500円(税別)



死の淵で彼を奮い立たせたのは、100kmウルトラマラソンに復帰するという、途方もない夢だった！ 読む人に勇気を与える、感動のガン生還記。

## ゴ

— ルドマン・サククス(GS)で新規事業を立ち上げ活躍するも、ガンが全身に転移。

生存率20%の死の淵から生還し復職した著者が「気付いたこと」とは。

— まず、国内のメーカーを辞めて米国へ。大幅なキャリアチェンジですが。大久保 自身、若い頃は国内志向だと思っていました。でも、自分が海外で頑張りたいと思えば海外志向に変わるし、そうでないと思えば国内志向に戻る、というだけの話だと思います。私は、ビジネススクール留学のために

会社を辞めるとき、辞職しないで後悔するよりは留学して後悔するほうを選ぶ、と思って決断しました。

— 自費でMBA取得、GSに入社。とてもハードな日々だったのでは。

大久保 大学院修了はギリギリでした。米国で子供が産まれたのに妻は外国人を苦手にしている、家族のサポートが最優先だったので。就職はコンサルティングファームと迷ったのですが、新しいことができるのでGSを選びました。もちろん毎日の労働は厳しいものでしたが、むしろそれを望んで渡米したので、懸命に働きました。



大久保淳一 | Junichi Okubo

シカゴ大学MBA。1999年より2014年までGSに勤務。07年、睾丸ガンの全身転移が判明。10カ月の入院治療後、GSに復職。現在は「5years」代表。

でも、GSで誰も何も教えてくれないことには戸惑いました。「自分で察して理解しろ」という文化なのですね。あいまいに伝えると、メールの一通もまともに返信されない。だから生き残るために必死で明確な「伝えかた」を身に付けました。

— そして病気を経験。闘病の前後で、変化したことはありませんか。

大久保 大きく変わったのは「やる気」ですね。私は「生かされた」と思っています。病棟では、生きたいと願っても生きられなかった人を何人も見きました。そうすると、漫然と生きることをとても罪深いと感じるようになります。だから、やりたいことがあったら全力でやらないといけない。期限を決めて、それまでに絶対やり遂げる。そんな気持ちで行動する人間になったような気がしますね。

— 「いつかやりたい」というような考えかたをしなくなったのですか。

大久保 はい。生きるということへの情熱、つまりやる気は、以前とは大きく違ってきます。GSの同僚と飲みながら「優秀な人とはどういう人だろう」と話したことがあります。結論は、さまざまなスキルを有することも大事だけど、やはり「やる気がある人」でばしせず、それに向かって全力を尽くす。人に尋ねるのを恐れない。ひどい

ことを言われてもくじけず「もう一回教えてください」と頼む。私たちが生きていくのは教科書のない世界ですから、考えてもわからないことは、人から学ぶのが一番なんですよ。

— その「やりたいこと」がわからない人は、どうすればいいのでしょうか。

大久保 私もかつて「5年後の自分はどこありたいのか」と自問自答し、悶々としていたことがあります。でも、そうした問いは永遠の課題なのです。逆に言えば、その回答を「今の自分」の中に探そうとするのは、求めすぎなのです。ただし、自分に問いかけ続けることは大切です。そうすることで、いつか本当にやりたいことが見えてきます。見えてくるまでは、現在の仕事ないし役目が自分に合っていると考えて、黙々とこなしていくのが素晴らしいことだと思います。

— やりたいことが見つからなくても、見つかったのに道を外れるようなことがあっても、どうにかなるのですか。

大久保 人生は、まっすぐな一本道ではありません。順調に見えていても、いつどこで落とし穴に落ちたり、真っ暗なトンネルに迷い込んだりするか、わからないものです。でも、諦めてはいけません。夢をかねたいという強い気持ちさえ持ち続けられれば、必ずや次の機会が来るし、努力が報われるときも来る。人生には、いつでも、何度でも、チャンスがあるので。🍀